

多様な活動を包含する場のデザインの課題と展望 -地域創生の主体としての地域人のインタビューを通して

田中 晃代¹

¹ 正会員 近畿大学准教授 総合社会学部総合社会学科 (〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1)
E-mail:t-akiyo@socio.kindai.ac.jp

大阪市住之江区では、地域を盛り上げるための市民同士の多様な活動を受け入れる情報交流の「場」が設置され、市民活動を深化させている。そうした「場」では、従来のように行政職員や専門家が職務で参加し、市民活動の支援をしているのではなく、職員や専門家自身が一市民として「場」に参加し、共感をベースに緩やかなつながりづくりを展開している。本研究では、従来の審議会や法令に基づかない私的諮問機関の組織構成員とは異なる地域創生の主体としての地域人（行政職員、専門家、居住者、地域愛好家等）に焦点を当て、インタビューを重ねながら、多様な活動を包含する場のデザインのあり方について分析考察を進める。

Key Words: *the design of meeting for information exchange, participating, variety of civic activities*

1. はじめに

(1) 研究の目的

大阪市では、「地域公共人材開発事業」を実施し、地域内の市民活動団体間の連携や話し合いによる合意形成を進めていくコーディネートやファシリテートができる人材を登録し（2016年4月現在95名登録）、市内の公益的な活動をしている市民グループ・団体から申請があれば、派遣を積極的に進めている。市は、こうした派遣によって、新たな市民活動が生まれたり、活動が活発になり、継続的な活動ができることを企図している。

地域公共人材については、申請者自らが申請し、「地域公共人材育成プログラムを修了する」「市民活動の経験がある」か「大阪市の実施する地域コミュニティ支援事業の従事者としての経験がある」「大阪市の実施する地域づくりに関する研修や講演を複数回以上引き受けたことがある」等4つの登録要件を満たせば申請可能となり、事業の理解度や実績、具体性・実現性による評価基準が満たされてはじめて、地域公共人材として市によって登録され派遣される。

このような市の申請基準や選考基準をクリアすれば、地域づくりの専門家としての質を確保することができ、

市民活動に質の高い助言を提供することができるものの、派遣された地域公共人材の責任も重く、地域づくりがスムーズに展開できなければ、ストレスになる可能性もあるのではないかと考える。また、地域公共人材申請基準や選考基準のハードルも高く、申請を躊躇する可能性もあるという点で、地域公共人材の発掘についても限界があると推察される。

そこで、今回事例として取り上げる大阪市住之江区の「シャベリバ」を中心に、地域交流の「場」のデザインの実践のなかで、地域公共人材の育成が可能となり、さらに地域活動が新たに生み出されたり、活発な市民活動が継続的に展開されるなどの副次的効果を生み出す可能性を検証しつつ、地域交流の「場」のあり方を検討する。

本研究のタイトルでもある「地域人」については、既に中沢が、「日常的あるいは中心的にはローカルな領域を行動することが多いのだが、背景には明らかにグローバルに広がる領域をもっている」ことや「あらかじめつくられたスケジュールやイメージあるいはストーリーといったものをもたない」ことで、日々「進化」し「深化」しているとしている。「ひとつの動きが次の行動やアイデアを生み出すだけでなく、そのことがさまざまな地域に飛び火して、それらは地域ごとに変換され、別の

動きとなって、それがまたもとの地域に帰ってきたりする」という行動のしかたを持つとしている¹⁾。こうした中沢の定義する「地域人」の行動のしかたをベースに、地域人が運用するシャベリバのデザインの課題や今後の展望について検討し、地域を担う公共人材の育成の可能性について探る。

(2) 研究の方法

研究の方法については、2016年の2月から3月にかけて、住之江区で実施されている「シャベリバ」の運用主体や参加者、区の職員を中心にインタビュー調査を実施した(表1)。

表-1 インタビュー調査の概要

主体	属性	性別	年齢	主な活動場所	調査日
1 A氏	区民 芸術家	女性	40代	北加賀屋ク・ビレ邸	2016年2月25日
2 B氏	職員 住之江区長	男性	50代	全地域	2016年3月2日
3 C氏	企業 財団	女性	40代	北加賀屋不動産業	2016年3月7日
4 D氏	区民 喫茶店経営者	男性	40代	粉浜シャベリバ	2016年3月17日
5 E氏	区民 ボランティア	男性	60代	加賀屋新田会所跡	2016年3月17日
6 F氏	区民 ボランティア	女性	60代	安立商店街	2016年3月16日
7 G氏	区民 NPO 法人	女性	40代	きずなシャベリバ	2016年3月24日
8 H氏	区民 Web デザイナー	男性	30代	南港シャベリバ	2016年3月29日
9 I氏	区民 芸術家	男性	40代	北加賀屋シャベリバ	2016年3月31日

2. 住之江区のまちづくりの現状

住之江区は、大阪市の南西部に位置しており、東部は、紀州街道沿いの古い街並みや昭和初期に開発された洋風長屋が点在する住宅地、商店街がある。中部は、18世紀以降の大和川付け替えによる新田開発における新田会所跡や重工業地帯、名村造船跡などの近代化産業遺産の認定を受けた施設も存在する。西部の咲洲は、フェリー

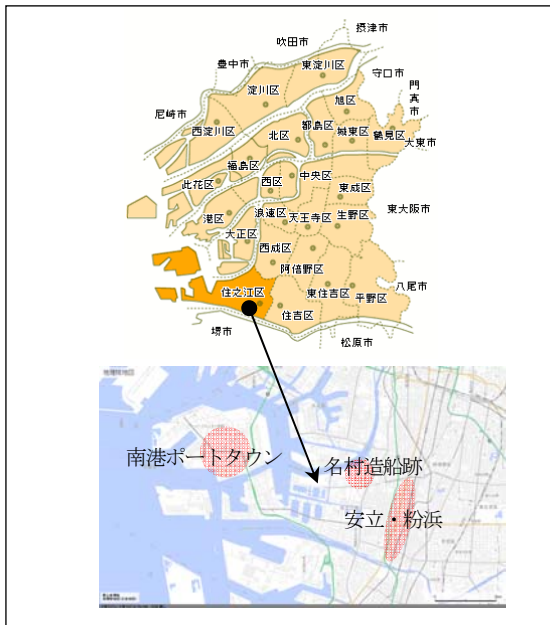


図-1 住之江区の位置

(住之江区ホームページ及び国土地理院地図より作図)

埠頭やコンテナ埠頭等の港湾施設、4住区の集合住宅を中心とした南港ポートタウンや魚つり園、野鳥園、国際見本市会場、アジア太平洋トレードセンターなどの施設もあり、アメニティ豊かな環境を維持している。また、南港ポートタウンは、咲洲ウェルネス構想特区²⁾における住民主体のコミュニティデザインを取り入れたプロモーション事業や健康ライフ実践都市としての環境整備事業が展開されている。

3. 地域ごとのシャベリバの特徴と展開

元区長である B氏が各地域にシャベリバという地域交流の「場」の形成を促した。現在は、「南港シャベリバ」「シャベリバ in 北加賀屋」「シャベリバ in 粉浜」「シャベリバ in きずなステーション」といった4つの地域交流の「場」が設置されている。こうした地域交流の「場」には、地域ごとに参加者や場所が異なっているものの、共通したルールに基づいて運用されている。具体的には①肩書を持ち出さない、②人の話を否定しない、③一人が長くしゃべらない、④参加も退出も自由、⑤政治・宗教活動はしない等である、こうした共通のルールさえ守れば、あとは地域に応じてどのように運用してもかまわないというものである。各シャベリバは、設置当初は、元区長からの声かけではあったが、その後は、すべてその周辺地域に住まう市民が主体となって運用されている。さらに、主催者は2カ所以上のシャベリバに参加していることがわかった(表2)。また、シャベリバ開催の告知や開催報告は、すべて Face book とされており、シャベリバ終了後は必ず参加者全員の集合写真を撮影している。

表-2 シャベリバの参加の主催者と参加状況

主体	属性	性別	年齢	北加賀屋 シャベリバ	粉浜 シャベリバ	きずな シャベリバ	南港 シャベリバ
1 A氏	区民 芸術家	女性	40代	●			
2 B氏	職員 住之江区長	男性	50代	●	●	●	●
3 C氏	企業 財団	女性	40代				
4 D氏	区民 喫茶店経営者	男性	40代	●	◎		
5 E氏	区民 ボランティア	男性	60代		●	●	●
6 F氏	区民 ボランティア	女性	60代		●	●	
7 G氏	区民 NPO 法人	女性	40代	●	●	◎	●
8 H氏	区民 Web デザイナー	男性	30代	●			◎
9 I氏	区民 芸術家	男性	40代	◎			

◎: シャベリバ主催者、●: シャベリバ参加者

(1) 南港シャベリバ

南港シャベリバの運用主体である H氏の参加のきっかけについて、以下インタビューをおこなった。

「B氏と Face book で友達になった。それがきっかけで、シャベリバ in 北加賀屋を紹介いただいて参加した。そのなかで、私が南港に居住していることを伝えると、さらに B氏は、南港シャベリバを紹介、参加する

ことになった。参加した当初は、ATC の音楽・ダンススクールあかね館でシャベリバをやっていたが、区役所の職員 4~5 名と F 氏のみでの参加であったため、住民が集まりやすい UR 団地集会所の現在の場所に移動し、南港シャベリバの運用主体となる。シャベリバは、何かを決める会議でもないし、実行する会議でもないため人が離れやすいが、地域愛をベースにコミュニケーションをしっかりとっていくことで離れていくことを回避したい。」(H 氏語り)

以上のことから、南港居住者の H 氏は、B 氏の誘いで参加したシャベリバがきっかけで、居住地である南港シャベリバの運用主体となり、次の活発な活動に展開していくことになる。

南港シャベリバの運用主体となってからは、南港ポートタウンの再生に向けて「咲洲ウェルネスタウン構想特区」のなかの地域住民と大学等からなる「咲洲まちづくり実行委員会(咲くまち PT)・魅力発信部会」の活動を担うことになる。もともと職業が Web デザイナーの H 氏は、その専門技術を活かし、「南港スタイル OSAKA」というホームページを作成し、南港ポートタウンに住むファミリー層を中心に南港に住む人の小粋なライフスタイルを提案し情報発信をしている。

(2) シャベリバ in 北加賀屋

シャベリバ in 北加賀屋の運用主体である I 氏の参加のきっかけについて、以下インタビューをおこなった。

「名村造船跡地(2009 年近代化産業遺産指定)を手がけていた小原氏の紹介で北加賀屋に引っ越してきた。千島土地と一緒に KVC 構想、名村造船跡地の活用、鞆館、コーポ北加賀屋などを手掛けてきた。そこで、B 氏が来て、住之江区をブランディングしたいので、手助けをしてほしいとのことで、区政会議への参加やシャベリバの運用をすることになった。現在のシャベリバは、ク・ビレ邸でなく、新築分譲マンションの建設や子育て世代が増えているカナリヤ条約という施設で必要に応じて開設している。シャベリバを定例化しない理由は、具体的に行動を起こし何かやりたいという具体案をお持ちの方が来られて仲間を募り、案を実現する場だと考えているからである。具体案がなければ、話し合いの場を設置する必要もない。今後は、近隣の子育て世代を巻き込むために、小学校の設立 100 周年記念イベントを住民参加で進めていき、シャベリバを活用できれば良いと考えている。」(I 氏語り)

としており、シャベリバの進め方のルールは踏襲されているものの、開催頻度やテーマに関しては、運用主体の意図がつけ加わったものとなっている。

(3) シャベリバ in 粉浜

シャベリバ in 粉浜の運用主体である D 氏の参加のきっかけについて、以下インタビューをおこなった。

「北加賀屋のシャベリバ(ク・ビレ邸)に参加していた。そこで、B 氏から声がかかり、2014 年 10 月から粉浜シャベリバとして喫茶プロコップでワンドリンク制をとって実施することとなった。それ以前は、安立商店街や粉浜商店街の人たちが中心のシャベリバだった。シャベリバ参加メンバーも固定化されていたため、閉塞感が出てきて、テーマを掲げてやるほうが良いのではという意見があったが、とりあえず、何も決めずに入退出も自由ということで始めた。テーマを決めないと人が集まらないのではないかとということであったが、町内会所属の人に来てもらったり(※当初は第 2 水曜日だったが、町内会の集まりがその日であったため、第 4 水曜日に変更した)、生涯学習でハンドベルサークルの活動をしているメンバーに声かけをして来てもらった。また、西宮の門戸厄神で活動をされている人も来られるなどや、別のシャベリバから参加してくれる人もあり、毎回 15 名程度の参加人数が確保できるようになった。今後は、シャベリバの告知だけでなく、シャベリバで話した内容の報告も拡散する方法を検討していきたい。また、若い世代の参加を促し社会学習の場としたい。」(D 氏語り)

粉浜シャベリバは、喫茶店でワンドリンク制を条件として飲食をしながら情報交流をおこなっているため、アットホームな雰囲気が特徴である。

(4) シャベリバ in きずなステーション

シャベリバ in きずなステーションの運用主体である G 氏の参加のきっかけについて、以下インタビューをおこなった。

「粉浜シャベリバの前身の安立のシャベリバで元区長に出会って、粉浜や南港、北加賀屋、住之江公園などのシャベリバに参加することになった。元区長は、若手で前向きな人を集めたいという思いがあったのでお声がかかったのだと思う。そのうち、きずなステーションで、NPO 法人を立ち上げる話がでてきて、8 名で教育・食育・音育・住育というコンセプトをもとに NPO 法人すみのえ育を立ち上げた。現在 3 名の理事、1 名の監事でも NPO を運用している。B 氏からは、町おこしのイベントを事業化して収益があげられるようにと NPO 法人化の助言があった。法人化した後、区役所 1 階のきずなステーションの指定管理もおこなっている。メンバーが固定化してきたため、ゲストスピーカーを呼んで多様な人に参加してもらおう工夫をした。ゲスト制にすると、次回は誰を呼んでくるかで悩み、逆に主催者側がプレッシャーを感じる。また、告知を十分にすることと、区域にこだ

わらず区外の人も自由に参加できるようなオープンな場を提供していく必要があると考える。誰でも参加できるような広報のしかた、チラシの作成のしかたが必要となる。」(G氏語り)

G氏は、各シャベリバに参加することによって、住之江区のまちづくりを総合的にとらえることができ、さらにNPO法人を設立して区民への公共サービスの担い手としての活動を展開することになった。

(5) シャベリバを支援する助っ人「立ち上げ屋」の存在
各シャベリバの運用主体ではないが、各シャベリバに参加し、イベントの告知やボランティア活動をしているE氏とF氏がいる。彼らは、シャベリバinきずなステーションの運用やNPO法人すみのえ育の立ち上げに携わって尽力してきたが、物事が立ち上がり次の世代の担い手が見つかり、その担い手に運用を任せ、その中心的役割から別の活動での役割を引き受けるいわゆる「立ち上げ屋」としての行動パターンがインタビューから聞き取れた。彼らは、住之江区のボランティア活動の全体を把握し、10年先の環境づくりにむけて次世代の担い手を育成する活動のリーダー的な役割を担っていることが、以下インタビューから聞き取れた。

「新たな参加者をいかに増やしていくかが成功の秘訣。人それぞれ関心が異なるが、その時期その時期で話題の人がいればよい。そのような仕組みをどう作っていくかが必要ではないか。」(E氏語り)

「10年先のことを考慮し面白い環境づくりをしたい。シャベリバは毎日どこかで開設していて、話したい人が話し、それを聞きたい人が聞く。行政が手を放して、市民が自分たちのライフワークで継続してやれば良い。しゃべること子どもも大人も心の栄養になる。シャベリバ運用は元気なシニア世代が実施すべきである。」(F氏語り)

以上、住之江のシャベリバの主催者及び参加者にインタビューをした結果、以下のことがわかった。①シャベリバの主催者は少なくとも2カ所以上のシャベリバに参加し、他地域のまちの情報について広域的に把握している。そのことで、活動の有機的なネットワークも生まれやすく、次の活動の担い手発掘にも役立っているのではないかと。

また、シャベリバに参加することで、区の主催する事業やイベント等にも参加・参画しやすくなり、行政と区民の協働体制が促進されることもわかった。さらに、市民活動に関して物事を立ち上げ軌道に乗せるいわゆる「立ち上げ屋」と称する市民活動を達観した人物の存在も確認することができ、シャベリバは地域公共人材の宝庫であることもわかった。

当初各シャベリバで共有した共通するルールのほかに、地域で異なる個別の運用の仕方があることがわかった。具体的には、「シャベリバは、プロジェクトを実行する場か否か」ということと、「シャベリバでの話し合いには、テーマを掲げるべきかどうか」ということである。いずれも目的志向の「場」を形成することに重きをおくのか、対話のなかで「共感」を形成することに重きをおくのかの違いであるといえる。こうした違いは、主催者のシャベリバに対する価値観の違いであり、多様な活動を包含する「場」を形成するためには、主催者は、シャベリバの参加者の増減と合わせて、運用を柔軟に変えることが求められていると考える。

参考文献

- 1) 中沢孝夫：＜地域人＞とまちづくり，p.5，講談社現代新書，2003年
- 2) 住之江区役所：咲洲ウェルネスタウン計画 ver.1.0.南港ポートタウンの未来に向けて,2015年

(2016.4.22 受付)

4. おわりに

THE CHALLENGES AND PROSPECTS OF THE DESIGN OF MEETING FOR INFORMATION EXCHANGE IT ENCOMPASSES A WIDE VARIETY OF CIVIC ACTIVITIES.

Akiyo TANAKA

Suminoe-ku, Osaka. Meeting for information exchange has been established by citizens. In the meeting, people of various positions are participating. By participating in the meeting, citizens are in better activities, while increasing the fellow. The meeting of information exchange grow up people to support the public. Also, born a new activity. Note point, Conference organizers, there is a need the flexibility to change the operation of the conference according to the situation of the participants